

# 小説『二つの祖国』をめぐる虚実とプロパガンダ

佃 陽 子

## はじめに

日系人が日本の大衆メディアで盛んに取り上げられた、1980年代初頭の「日系人ブーム」の筆頭に挙げられるのは、1983年に出版されたベストセラー作家山崎豊子による『二つの祖国』である。日系アメリカ人二世を主人公にアジア太平洋戦争を描いたこのベストセラー小説は、翌年のNHK大河ドラマで映像化されることによって、アメリカでの人種差別や米政府による戦時強制収容を含めた日系アメリカ人の苦難の歴史を、日本の視聴者に広く知らしめた。しかし、この小説とドラマは日系アメリカ人コミュニティや日米の識者らから激しい批判を浴び、アメリカでのドラマ放送が開始直前に中止されるという異例の事態を引き起こした。当時アメリカでは、強制収容に対する補償運動が重要な局面を迎えていたため、日系人の合衆国に対する忠誠心を疑われて強制収容が正当化されることを恐れた日系人指導者らは、日米二つの「祖国」の間で苦悩した二世を描いた小説を真っ向から否定したのである<sup>1</sup>。

『二つの祖国』は歴史的事実をもとに小説化したフィクションであり、主人公を含めてその家族や友人は架空の人物であると山崎は述べる<sup>2</sup>。しかし、3年以上におよぶ当事者へのインタビューや膨大な史料調査を行って山崎がリアリティを追求したこの小説では、他の山崎作品の多くがそうであるように、主人公をはじめ複数の登場人物にはモデルが存在する。日系アメリカ人コミュニティの事情に精通する者ならそのモデルが誰であるかは明白であったため、日本語を読める日系人は山崎の小説を「事実」として読み、小説の内容が「事実」と異なると批判した者さえいた<sup>3</sup>。

日本文学研究者の日比嘉高は、日本近代文学においてモデル小説が引き起こしたプライベートをめぐる「トラブル史」から、〈私的領域〉と〈公的領域〉に関する日本社会の言説の変化を分析し、「虚と実のあいだに立つ小説の言語は、虚と実を結ぶ言語でもある」と述べる<sup>4</sup>。ある歴史的出来事を描いた小説は、その「出来事、人物、それにまつわる語りや歴史をその言語のなかに取り込む」ことになり、その際に「作者の意図とは別に、どれだけ整合的に構築された作品であっても、必ず説明のつかぬ、トゲやササクレのような「雑音」が少なからず紛れ込む」という<sup>5</sup>。戦時強制収容や東京裁判といった歴史的出来事を取り込んだ山崎の小説もまた、ベストセラー小説という商品として事実と虚構を媒介し、日米社会で様々な「雑音」を生み出した。

『二つの祖国』の主人公、天羽賢治は日本にひどく同情的な日系二世で、アメリカではなくむしろ日本に忠誠心を持つ右翼的な国粋主義者のようだと日米で批判されたが、主人公のモデルとなった人物が実在したことを認識していた日系アメリカ人は決して少なくなかった。むしろ認識していたからこそその批判であったともいえる。天羽賢治のモデルとなった故人・伊丹明の人生は、一見、日系人のアメリカ合衆国に対する忠誠心に疑問符を与えかねないものであったため、伊丹は日系アメリカ人の歴史として触れられたくない、都合の悪いものだった。

英語を第一言語とする日系アメリカ人の多くが伊丹明、特に彼の死の真相について沈黙したのは対照的に、日本および日本語のメディアでは、山崎の小説を契機として伊丹の人生が様々な人物によって語られてきた。1950年に39歳で他界した伊丹の物語は、日本の大衆メディアにおいて記憶をもとに繰り返し語られる過程で、小説の中の虚像と実像が錯綜していく。本稿は『二つの祖国』の主人公のモデルとなった伊丹をめぐる語りの遍歴をたどることにより、その虚像がどのような背景から生まれたのかを考察する。山崎の小説は伊丹明を世間に広く知らしめたが、それは伊丹について語った最初の著作ではなかった。伊丹を取り上げた日本の様々な大衆メディアをさかのぼると、「日本の国粋主義に心

酔した日系アメリカ人二世」像の創造／想像の起源は、アジア太平洋戦争で展開された日本帝国軍のプロパガンダ戦略の残滓と、連合国による極東軍事裁判での「勝者の裁き」に対する戦中派の憤りに見出すことができる。冷戦期にアメリカの庇護下に置かれた日本が急速な経済成長を遂げた後もそれらは長くくすぶり続け、80年代の日系人ブームにおいて、日本のナショナリズムとエスノセントリズムを体現する日系アメリカ人、伊丹明＝天羽賢治の語りを紡ぎ出したのである。

伊丹のように戦前アメリカで生まれた後に日本で教育を受け、アメリカへ帰った日系二世は帰米二世とよばれ、その多くは日英二つの言語世界と、日米を含む複数の国家、地域という多層的な空間でアジア太平洋戦争を経験した。しかし、戦後のアメリカ社会で日系を含むアジア系アメリカ人がモデルマイノリティとしてもはやされ、1970年代以降には戦時の強制収容が米政府による不正義であったと見直される中で、日系アメリカ人の歴史は移民集団が主流社会へ同化する成功物語として構築されつつあった。こうした歴史叙述にとって、日本本国と「強すぎる」結びつきを持つ帰米二世の経験は都合の悪い不協和音として周縁化されてきた<sup>6</sup>。

伊丹のような帰米二世の存在を日系アメリカ人史、ひいては「移民国家アメリカ」の歴史の中に位置づけることは単純ではない。日系アメリカ人史研究のパイオニアである日系二世のユウジ・イチオカは、強制収容への補償が達成されるまで、戦前の日系コミュニティにおける日本のナショナリズムに関する論文の発表を控えていた<sup>7</sup>。その後、イチオカは伊丹と同時代に生きた日系二世ジャーナリスト、一磨・バディ・宇野についての論文を発表した<sup>8</sup>。宇野はアメリカでの人種差別経験に対する反発から、アジア太平洋戦争では日本軍のジャーナリスト、将校となり、フィリピンで米軍の捕虜となった「不忠誠な二世」である。イチオカは日系アメリカ人の歴史から忘却された宇野を取り上げ、「二世世代の一切の複雑さを十分に理解するためには、包括的でなければならない」し、「彼と、その他彼のような二世に、日系アメリカ人史の中で正当な

位置を与えることが必要」だと述べる<sup>9</sup>。宇野とは対照的に、英語でも日本語で、日系アメリカ人よりも日本人によって、研究者というよりも大衆メディアによって、繰り返し語られてきた伊丹明には、どのように歴史の中で「正当な位置」を与えられるのだろうか。本稿では、移民・植民を含めた越境者について理解するためには、国家の枠組みを超えたトランスナショナルな視点が必要であるという立場から、伊丹の数奇な人生とその語りを分析する。

本稿ではまず、実在した人物、伊丹明の人生とはどのようなものだったのか、小説の主人公・天羽賢治と比較しつつ、一次資料を精査してその足跡をたどる。次に、1980年代の日系人ブームで大衆向けに大量生産された伊丹をめぐる様々な出版物で、日米の複数の語り手が伊丹を回顧する中で、フィクションが事実と複雑に絡み合っていた様子を分析する。日本において、日系アメリカ人の戦争体験はノンフィクションという形で日本の一般大衆向けに著され、それらの多くは日米のはざまで生きる日系アメリカ人の心理的葛藤をドラマチックに描くことで「日本人」を本質化し、ナショナリズムやエスノセントリズムを扇動する傾向にある<sup>10</sup>。日系人に関する学術研究はそうした大衆メディアが描く日系人を時に批判し、特に考察の対象とはしてこなかったが、本稿は日本の大衆メディアの本質主義的側面に考慮しつつ分析を行う。次に、山崎の小説の「起源」となった元陸軍大佐の経歴をたどりながら、「日本人よりも日本人らしい日系アメリカ人」像が生まれた歴史的背景とその意味を考察する。最後に、山崎の小説およびドラマ放送後に起こった、伊丹明の顕彰の越境性について触れる。

## 1. 天羽賢治と伊丹明

山崎自身は、主人公のモデルは複数の人物のエピソードを組み合わせたものであると述べているが、『二つの祖国』の主人公、天羽賢治の主だったモデルが伊丹明であることは明白である<sup>11</sup>。伊丹は天羽と同様、

20世紀初期に鹿児島出身の日本人移民の両親のもとカリフォルニアで生まれた二世で、生後すぐに鹿児島の叔母のもとで武士道精神を叩き込まれ、青年期にアメリカに帰国した。その後ロサンゼルス の邦字新聞の記者として活躍し、戦中はマンザナー収容所から陸軍情報部に志願し、戦後に東京裁判の通訳の言語裁定官をつとめ、米軍兵士として日本駐留中に若くして拳銃自殺を遂げた点も一致している。日本軍兵士となった実の弟と戦場で悲劇的再会を遂げたというのは、山崎が他の人物のエピソードを織り交ぜて発想を膨らませたものだが、主人公・天羽賢治を創作するにあたって、伊丹明という帰米二世の人生の物語が山崎に大きく影響したのは間違いない。

伊丹明の人生とはどのようなものであったのだろうか。伊丹については、ノンフィクション風小説や回顧録が多数出版されているのに加え、河野利佳子やマイケル・ジンによる学術的な研究が彼自身の足跡を丹念に追っている<sup>12</sup>。ここでは伊丹の出身高校である鹿児島県立加治木高等学校の記念誌に収録されている、本人自筆の記録に加え、公文書をはじめ多くの一次資料を用いた河野とジンの学術的な研究に依拠し、その略歴を概観する<sup>13</sup>。

伊丹デイヴィッド明は、1911年カリフォルニア州オークランド市にて、鹿児島出身の日本人移民の両親の四男として生まれ、1歳の時に看護師の女性に伴われて、桜島を望む鹿児島湾の鹿児島県始良郡加治木村（現在は始良市）の叔母の家に預けられた。その後、1931年に帰米するまで約19年間を日本で過ごした。入学した柁城尋常高等小学校では非常に成績優秀だったそうで、5年生で加治木中学に飛び級したほどであった。しかし、その後陸軍幼年学校や海軍士官学校を受験するも、健康上の理由から不合格となる。晩年の伊丹と日本で知遇を得た木梨幸三によれば、不合格の本当の原因は伊丹がアメリカ生まれであったことだと後に教師から聞かされたという<sup>14</sup>。鹿児島独特の「郷中教育」を受けて弓道や漢学に親しむようになった伊丹は、漢学の復興をかかげて1923年に設立された大東文化学院（現在の東大文化大学）に入学し、上京し

た。漢学を熱心に勉強していた伊丹だったが、一度は落第し、結局卒業しないまま1931年7月に慌ただしく帰米した。突然の帰米の理由は様々な人々が異なる説明をしている。木梨は、アメリカにいる父から母の危篤を伝えられたからとする一方で、日本人の令嬢との結婚をその父親に拒否されたからなど、様々な憶測がある<sup>15</sup>。だが、河野が指摘するように、二十歳を迎えて徴兵検査が目前に迫る中、徴兵忌避のために帰米したと推測するのが妥当であろう<sup>16</sup>。伊丹の5歳年長で、日本で長期間教育を受けた帰米二世のカール・ヨネダもそうであったように、日米二重国籍者だった帰米二世が、日本での徴兵による米国籍の喪失を恐れて、二十歳前に帰米することは当時珍しいことではなかった<sup>17</sup>。帰米の際、鹿児島県選出の衆議院議員で日英バイリンガル雑誌『海外之日本』の社長、中村嘉寿に同行していることから、渡航費用を中村に用立ててもらったのではないかと思われる<sup>18</sup>。

帰米後の伊丹は、アラスカの漁船で季節労働者となるなど苦しい生活を強いられたようである。ようやくアメリカで両親と再会できたものの、両親は伊丹の帰米から2年後の1933年に日本に帰国し、父はその年に、母は翌年に亡くなっている。理由は明らかでないが、鹿児島の地方紙代表者、堀田哲によれば、父は帰国前から肺結核を患っており、母はその後自ら命を絶ったという<sup>19</sup>。アメリカで教育を受けたことがなかった伊丹は、高校から始めて、当時ジュニア・カレッジと呼ばれた二年制大学、そしてカリフォルニア大学ロサンゼルス校に転入し、学業に励む。同時期に、1931年に創刊されたロサンゼルス邦字新聞『加州毎日』の創業者である日本人移民一世の藤井整に見込まれて、1934年から新聞記者として活躍するようになった。1935年から1年ほど首都ワシントンの日本大使館にも勤務したが、その後再び『加州毎日』に戻っている。

編集長として自らも筆をふるった藤井は、日本のアジア侵攻に対する反発がアメリカで強まる中、紙面で日本を擁護した。伊丹も藤井に同調する記事を多数執筆したため、当時の日系コミュニティの多くは伊丹を親日派の国粋主義者とみなしていたし、後に伊丹を語った日本語メデイ

アもまたそのように描きがちである。しかし、伊丹のコラムを歴史的文脈から詳細に考察したジンは、伊丹のアイデンティティを「日本の国粋主義者」あるいは「愛国的アメリカ人」のように単純に二極化するのではなく、当時の日米関係およびアメリカ国内また日系コミュニティ内における、帰米二世の複雑な立場を理解するべきだと論じる<sup>20</sup>。日本で長い年月を過ごし、アメリカでも高等教育を受け、日米二つの文化・言語に精通していた伊丹は、アメリカに対する盲目的な忠誠心から日系人が日本を一方的に批判するのは、日米関係にとって決して好ましいことではないと考えており、また、帰化不能外国人としてアメリカで生きざるを得なかった日本人移民一世の複雑な立場を理解していた。伊丹はアメリカの主流メディアによる日本批判に異を唱え、日米関係を楽観視することで日系コミュニティ内に渦巻いていた日米開戦への不安を払拭しようとした。日米二重国籍であった伊丹が1935年に日本国籍を離脱した事実は、彼を国粋主義者とみなしていた戦後の日本語メディアにとっては理解しがたい行動だったようである<sup>21</sup>。しかし、1924年に日本の国籍法が変更されて以降、日系市民協会（Japanese American Citizens League 以後 JACL）を中心とする二世らが、二重国籍の二世の日本国籍離脱運動を展開しており、伊丹もまたそれに同調した一人であった<sup>22</sup>。

日米関係に対する伊丹の楽観論もむなしく、1941年12月7日の真珠湾攻撃により日米開戦となった後、伊丹の親日的論調は紙面から姿を消した。翌年、米政府が西海岸に住む日本人・日系人に対して内陸部への退去あるいは収容所への移動を命じた際、伊丹は南カリフォルニアのマンザナー収容所に自主的に移った<sup>23</sup>。開戦前の親日姿勢から一転し、強制退去・収容に積極的に協力することが愛国的アメリカ人としての務めだと先陣を切った伊丹の「転向」は、単なる日和見主義のようでもある。実際、以前から彼を敵視していた共産主義者や労働運動家を中心とする急進派の帰米仲間からの疑惑を免れなかった。しかし、JACLのロサンゼルス帰米支部代表を務めていた伊丹は、真珠湾後、JACLが密かにFBIや米軍と接触して、日系コミュニティ内で米国に不忠誠だと思わ

れる人物の情報を提供していたことも知っていた。FBIに逮捕された一世指導者とともに、このとき米政府に忠誠を疑われたグループが帰米であった<sup>24</sup>。自分も含めた帰米が不忠誠者とみなされ、監視の対象になっていることを知り困惑した伊丹は、強制収容に協力することが最良の選択肢だと感じたのかもしれない。マンザナー収容所での生活が始まってからの伊丹は、山崎が描いた天羽賢治と同様、米政府当局に協力的なJACLの二世とも、親日的なグループからも距離を置いていたが、高い言語能力と持ち前の指導力を当局に認められて、収容所をまとめる立場に置かれるようになる。収容所に自主的に転居してから約8ヶ月後の1942年11月に伊丹はマンザナーを去り、ミネソタ州に新設された日本語情報兵を養成するための陸軍語学学校の教官に着任した<sup>25</sup>。小説やドラマでは、主人公が収容所での暴動を目撃し、「忠誠登録」と呼ばれる、当局が不忠誠者を振り分けるために行った調査に憤って家族が分裂するが、実際の伊丹はそれらが起こる以前にミネソタに移っている。

日本の言語・文化に精通する伊丹は、語学学校の教官として多数の日系語学兵を養成した。このような学校で特殊な訓練・教育を受けた二世語学兵は、日本軍の暗号解読や捕虜の尋問、通訳などの対日情報戦において重要な役割を果たしたが、皮肉なことに、最も貢献したのは米政府が忠誠心を疑った帰米であった<sup>26</sup>。伊丹は同じ帰米二世の妻、君子とまだ幼い娘のミチを収容所からミネソタに呼び寄せ、収容所とは比較にならない快適な生活を送っていたが、語学兵として前線に出た卒業生たちの悲報を聞くにつれて教官を続けることに疑問を感じ、1944年3月、陸軍に入隊し、太平洋前線に出る<sup>27</sup>。この頃の伊丹のエピソードとして有名なのが、日本の故郷である鹿児島県加治木の方言で交わされた、東京-ベルリン間の日本人外交官による暗号電話の解読である。運命的なことに、この電話をドイツで話していたのが、故郷加治木で世話になった伊丹の恩人であり先輩の曾木隆輝だった<sup>28</sup>。多くの二世語学兵がサイパン、硫黄島、沖縄上陸作戦に関わったが、太平洋戦線での伊丹の活動は明らかではない<sup>29</sup>。山崎の小説では、主人公はフィリピンの戦場で日本

兵となっていた実の弟と劇的な再会を果たすが、これは伊丹の経験ではなく、戦中に日米で家族が引き裂かれた日系語学兵ハリー・フクハラのエピソードに着想を得たものである<sup>30</sup>。伊丹の兄の一人は戦中日本にいたが、病弱だったため戦後まもなく病死した。

戦後、占領軍として来日した伊丹は、除隊後まもなく極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判で、裁判の日英通訳をチェックする言語モニターを務める<sup>31</sup>。日本滞在中は郷里を訪ねるなど親戚や旧友との再会を喜んだ一方、連合国主導の裁判に精神を疲弊させていったようである。この間、伊丹は陸軍情報部所属時の功績により、リージョン・オブ・メリット章を受勲した。1948年11月に裁判が終わった後も、伊丹は日本にとどまり検閲の仕事をしていたが、1950年12月、代々木のワシントンハイツに住む妻子を残したまま、39歳の若さで自ら命を絶った<sup>32</sup>。

## 2. 日本語大衆メディアで交錯する伊丹明の虚像と実像

1980年代の日系人ブームの中で日本の大衆メディアは伊丹の自殺をスキャンダラスに取り上げ、「日本と殉死した、日本人よりも日本人らしい日系アメリカ人」としての伊丹像を作りあげた。山崎豊子が『週刊新潮』に小説『二つの祖国』の連載を始めた1980年6月以降、伊丹明という実在の人物は、虚構と実像の間を日本語大衆メディアの中でさまよい始めた。郡楠明による小説『化石の花火 極東国際軍事裁判秘話』では、主人公の婦米二世アービー伊丹明は、実在の伊丹とほぼ同じ人生をたどり、A級戦犯の処刑と同日にドラマチックに切腹自殺をする。郡の執筆の動機は、実在した人物を主人公に「事実と虚構で」物語を書き、「誰よりも祖国を愛し、米国籍にありながら日本に殉じ、二つの祖国に引き裂かれたアービー伊丹明の魂を」「発掘」したいというものだった<sup>33</sup>。『二つの祖国』の最終巻と同月には、島村喬の『東京裁判秘史：日系通訳官の凄絶な死』が出版された。ここでの主人公は伊村明彦という伊丹によく似た名前の婦米二世で、『化石の花火』と同様に割腹自殺をし、

その原因を「東京裁判の欺瞞性、そしてアメリカの原爆投下という戦争解決のための手段が、深くケロイドとなって、日系米人であるかれの胸に残ったこと」だと断じる。また、主人公の自殺を「日本人の一つの典型的な心情と性格が、日系二世でありながら、あまりにも強かったゆえの悲劇であり、同時に「日本人と戦争」を改めて考えるうえで、私たちに衝撃を与えた事件だった」と結んでいるため、伊丹（＝伊村）の自決のどこまでが事実で、どこまでが虚構なのかが曖昧にされている<sup>34</sup>。

さらに、大河ドラマ『山河燃ゆ』放送開始直前の1983年12月に出版された、島村の編著による『実録 山河燃ゆ 日系通訳官・伊丹明の生涯』では、ドラマで架空の人物として登場する天羽賢治は伊丹明だと同定されている。ここでは『東京裁判秘史』の伊村明彦の物語を圧縮した「ドキュメント・ストーリー」に加えて、伊丹の少年時代の写真など多くの資料がちりばめられ、鹿児島で育った幼年時代から伊丹を知る同郷の人々の「証言」も含まれている。また、保守派の論客として知られる加瀬英明による寄稿をはじめ、日系人や東京裁判に関連する書籍などを紹介するエッセイもいくつか収録されている<sup>35</sup>。

天羽賢治と伊丹明のイメージが重ね合わされたまま、二人の「郷里」鹿児島からも、大河ドラマ放送に合わせた出版が相次いだ。放送中に出版された小中学生向けのジュニア・ノンフィクション『ふたつの祖国ものがたり』では、伊丹明の人生の物語が、子供時代を過ごした鹿児島加治木を中心に描かれている<sup>36</sup>。監修を務めた鹿児島県歴史資料センター黎明館館長の新納教義は、伊丹の通った旧制加治木中学の後輩でもあり、山崎から伊丹についてインタビューを受けたことを後に語っている<sup>37</sup>。ここでは、天羽賢治が伊丹明であるという言及はないものの、山崎の小説をなぞっているのは題名から明らかである。また、大河ドラマの放送に合わせて、鹿児島の出版社から「これが真相だ！『山河燃ゆ』主人公の生涯」という記事を収録した雑誌が出版され、伊丹を直接知る旧友や親戚によるエピソードが収録された<sup>38</sup>。NHKの長編ドラマの舞台に選ば

れることは、現在でも、各地方の町おこしとして地域の経済活性化が期待されるが、架空の主人公であるにもかかわらず、『山河燃ゆ』は同様の現象を引き起こした。

占領期に東京で伊丹と知り合った人々も、伊丹に関する手記を出版した。当時、銀座で内科医をしていた藤井尚治は1953年に著した『あなたは捉われている：ノイローゼ診断簿』で、一章を割いて伊丹の自殺について述べたが、その改訂増補版を1983年に出版し、伊丹のエピソードは「爆発ノイローゼ—二重国籍の重圧」として収録された<sup>39</sup>。藤井は伊丹の自殺を鬱病によるものだと見なしており、戦後30年以上経って東京裁判を回顧する中で、伊丹は非情な進駐軍の中では珍しく「日本人臭い人」だったと評している<sup>40</sup>。また、占領期に伊豆の温泉街で偶然伊丹と知り合った木梨幸三も、1985年に『ダイブ・伊丹明の生涯』を出版し、伊丹との思い出をつづった<sup>41</sup>。伊丹の死の直前まで交流のあった木梨は、拳銃自殺した遺品の確認に立ち会ったことにもふれ、切腹殉死説を暗に否定している。東京裁判終了後、ワシントンハイツの伊丹宅に通学のため書生として居候していた木梨は、伊丹を「日本人の魂を秘めてアメリカ人の装いで生きたに過ぎない、正真正銘の日本人ではなかったか」と回想する<sup>42</sup>。

日本での日系人ブームの中、伊丹に関連する人物についての出版も相次いだ。伊丹がかつて筆をふるった『加州毎日』の元記者、佐藤健一による『羅府ぎぎゅう音頭』は、同紙の創立者で伊丹の上司だった藤井整の伝記で、ドラマ放送開始直前に出版された<sup>43</sup>。戦前の藤井はその親日的姿勢で知られるが、アメリカの日本人移民の権利のために闘争した活動家でもあり、戦後には、日本人を含む帰化不能外国人の土地所有を禁じた1913年のカリフォルニア州の土地法の違憲判決を勝ち取り、人種差別的な土地法の撤廃に貢献した。だが出版の際の帯には、「山崎豊子“二つの祖国、”NHK大河ドラマ『山河燃ゆ』の主人公、天羽賢治を育て上げた男」という記述があり、実在する伊丹と架空の天羽が混同している<sup>44</sup>。藤井の伝記は翌年にも日本で出版された<sup>45</sup>。

一方、アメリカの日系コミュニティでは、山崎の小説を反米的と批判し、大河ドラマの放送中止を求める議論が、英語を第一言語とし、日本語を理解しない二世や三世を中心に展開されていた。そのような中で、モデルである伊丹の存在に言及したのは、彼を直接知る帰米二世たちであった。伊丹と同世代の帰米二世ジェームス小田は、英語で発行されている JACL の機関紙に寄稿し、山崎の小説のモデルが伊丹であり、伊丹がアメリカに忠誠を尽くした愛国者であったと述べた<sup>46</sup>。小田はロサンゼルスの日英両語の日系紙『羅府新報』にも日本語で寄稿し、伊丹を国粹主義者に仕立てた日本のメディアを糾弾するとともに、アメリカでのドラマ放送中止に反対する意見を表明した<sup>47</sup>。小田は、進駐軍時代に伊丹と親しかった二世の渋谷康一から聞いた話として、酒に酔って暴れた伊丹が米軍の MP から銃を奪って自らの頭を撃ったのが死の真相だと述べている。戦前には共産主義者という理由で、JACL の帰米支部から追放された小田は、当代表を務めていた伊丹を恨んだ時期もあったが、戦中はミネソタの陸軍情報部で伊丹から学び、和解していた<sup>48</sup>。小田は、戦前における伊丹の親日姿勢は見せかけで、実は一貫して左派であったと評している。

小田と同様に共産主義者で労働運動家として活動していたカール・ヨネダは、戦前から伊丹と反目しており、伊丹の死後も批判的姿勢を崩さなかった<sup>49</sup>。ヨネダも山崎から取材を受けていたが、その小説やドラマ放送には日米のメディアで強く反対した<sup>50</sup>。批判の一つは、小説中で、収容所における親日派の活動を監視するスパイ役のモデルにされた（とヨネダが感じた）ことである<sup>51</sup>。戦中、ヨネダは収容所で行われた帰米の会合についての報告書を米政府当局に提出し、小説でも描かれたマンザナー暴動では親日派から当局側の「イヌ」とみなされて脅迫を受けた<sup>52</sup>。ヨネダや小田のような急進派の帰米二世らは、米政府・軍による強制収容政策を日本のファシズム打倒のための必要悪だと妥協し、JACL とともに積極的に協力し、米陸軍情報部に入隊して対日情報戦で活躍した。ヨネダは 1983 年に英語で自伝を出版したが、山崎の小説と

ドラマに対するヨネダの批判を知った日本の友人が急いで翻訳し、翌年に日本語で出版された<sup>53</sup>。

ロサンゼルスの子米二世の文芸サークルで伊丹と知り合った、文学者の山城正雄は、小田やヨネダとは異なる視点で伊丹について語った。陸軍情報部に協力した小田、ヨネダや伊丹とは対照的に、山城は忠誠登録にノーを突きつけて、ツールレーク収容所に再隔離され「ノー・ノー・ボーイ」と呼ばれた、いわゆる戦時の「不忠誠分子」であった<sup>54</sup>。小説とドラマに対する批判がアメリカの日系コミュニティで高まる中、山城は『羅府新報』の日本語紙面に不定期に寄せているコラムで、山崎の小説を「自分の知っている人が主人公でありながら、アメリカ生活のリアリティーが感じられない」と批判し、「つまらない」と評した<sup>55</sup>。山城もヨネダのように、山崎の小説を「事実」として読んだ当事者の一人である。山城のコラムをまとめた初の著書『遠い対岸』は、大河ドラマ放送中に日本で出版され、その中には伊丹に関するエッセイ 14 編が収録された<sup>56</sup>。これらのエッセイは 1971 年から 73 年の『羅府新報』が初出だが、山崎が取材中に求めた資料として知られたためか、山城の予想を上回る売れ行きであった<sup>57</sup>。山城も小田と同様に、「日本の日本人」は伊丹の苦痛を理解しておらず、「忠臣義士の「苦衷」になぞらえて、創作されたのが殉死説」であると、切腹自殺説を否定する。その一方で、8 歳から 16 歳まで両親の郷里沖縄で暮らした山城は、伊丹を回顧する中で、「日本の山野を素足で走り回って育った子米二世は、心のどこかで日本を「所有」して生きていた」と述べ、「どんなにこの国 [アメリカ] に忠誠を誓っても、その心情までもが消滅してしまうとは、心理学の上ではあり得ない」と述べる<sup>58</sup>。山城は子米二世の持つ日本への親しみや共感を肯定している点で、山崎の小説やドラマに反対した、英語を第一言語とする二世や三世とは異なる姿勢を示した。

日系人ブームに沸く日本の大衆メディアにおいて、国粋主義者としての伊丹像が時に無責任に語られる一方で、生前の伊丹を直接知る日米の旧友は、山崎の小説とドラマに異なる見解を示しながらも、それぞれ正

しい伊丹像を伝えようとした。だが、日米の旧知が30年以上前に故人となった伊丹を追憶する中で、「完全な」伊丹像を語ることは不可能である。誰もが日米の特定の場所、特定の時代における伊丹を断片的に知っていたにすぎず、記憶をもとに紡ぎだされた伊丹像は、個々人が記憶したいと願う、都合のよいものに過ぎないからである。また、どこまでが事実あるいは虚構なのかが不明瞭な物語があふれる中で、それぞれの書き手・語り手は自身が知りえない伊丹の空白部分についてたがいに参照しあい、それを繰り返すことによって、さらに虚構と事実を重ね合わせ、フィクションをさも事実であるかのように抽出した。例えば、占領期の日本で伊丹と知り合った木梨ですら、東京裁判に従事する伊丹の様子を、フィクションである『二つの祖国』をそのまま引用して描いた<sup>59</sup>。しかし、伊丹に関する語りは山崎の『二つの祖国』から始まったわけではなかった。

### 3. 『二つの祖国』と伊丹をめぐる語りの起源

『二つの祖国』の週刊誌での連載終了前に、複数の書き手が小説の結末である伊丹の自殺についてつづったことからわかるように、『二つの祖国』は伊丹をモデルとした最初の著作ではない。大河ドラマ『山河燃ゆ』の放送開始間近となった1983年秋頃、山崎の小説に対する盗作疑惑が週刊誌で取りざたされるようになった<sup>60</sup>。この時『二つの祖国』の原作本とされたのは島村喬が1967年に発表した小説『二重国籍者』である<sup>61</sup>。島村は大河ドラマ放送前に伊丹をモデルとする著作を複数出版したが、1967年出版の小説では主人公を伊村明彦として伊丹の物語を描いた。さらに、1972年には百瀬三郎の名で、同じく伊丹=伊村の物語を『秘録東京裁判：二重国籍者の悲劇』として出版しているが、ここで中心となるのは題名からも明らかなように東京裁判である<sup>62</sup>。『秘録東京裁判』は東京裁判を連合国による「報復」とみなす激しい批判を基盤としており、真珠湾攻撃や原爆、当時の裁判の写真のみならず、A級戦犯

の一覧を含むおびただしい量の事実の列挙からはじまり、主人公の日米二重国籍者・伊村明彦に激しい言葉で裁判の不当性を糾弾させる<sup>63</sup>。伊村は東京裁判の言語モニターの立場から裁判を批判するだけでなく、A級戦犯を死刑から救うべく努力するが失敗に終わり、死刑執行と同月に神社で壮絶な割腹自殺を遂げることになっている。しかし、伊丹をモデルにした島村による著作はいずれも出版当時に社会の注目を集めることはなかった。『二つの祖国』の週刊誌連載開始前から山崎はすでにベストセラー作家であり、NHK大河ドラマへの映像化も含めて山崎の小説が80年代の日本社会におよぼした影響力に島村の著作と大きな差があったのは当然であろう。それでもドラマ放送開始前に島村が伊丹に関する著作を複数出版したのは、自分が「原作者」だと主張する意味も込められていた。

しかし、山崎による盗作疑惑はその後大きな論争になることはなかった<sup>64</sup>。それは島村の最初の著作にも、山崎の小説にも、伊丹明の物語には共通する資料があったからである。その資料が元日本陸軍大佐の町田敬二が提供した未刊行資料である。町田はかつて日本帝国陸軍の軍歌や宣伝映画、雑誌の発行に携わり、アジア太平洋戦争では日本軍の「宣伝班」の隊長として、作家や画家などの数々の文化人からなる「文化部隊」を率いてインドネシアのジャワ島でプロパガンダ活動を行った。かつて日本の対米英プロパガンダを担った町田が、アメリカの対日プロパガンダに従事した、いわば真逆の立場である伊丹の物語をなぜ描くに至ったのか、ここでは町田の経歴からその意味を考察する。

1990年に93歳で他界した町田は、1978年に出版した自伝『ある軍人の紙碑—剣とペン』で自身の人生を振り返っている<sup>65</sup>。清の漢口領事をつとめた外交官、町田実一を祖父に持つ町田敬二は1892年に鹿児島の名家に生まれた。町田家に婿入りした父の町田経宇は日露戦争で陸軍参謀をつとめ、後に陸軍大将にのぼりつめた。父は駐在武官としてモスクワ、パリ、北京など海外を転々としたが、町田自身は父に帯同することはほぼなく主に東京で育った。幼少期はフランスのカトリック宣教師が

設立した東京の暁星学園に通い、フランス語の素養を身につけた。その後、陸軍幼年学校から陸軍に入隊した町田は、軍歌の作詞を始める。コロムビアレコードから「護れ大空」(1933)などを発表したほか、読売新聞社が1935年の満州国皇帝溥儀の初来日を歓迎するための「満州国皇帝奉迎歌」の作詞を公募した際には、1万3,500を超える応募から町田の作品が選ばれ、北原白秋や西條八十から絶賛された<sup>66</sup>。そのほか、陸軍発行の月刊誌『軍事と技術』の編集や、軍が関与した日活の映画制作にもかかわった。1938年の上海事変で前線に出た後も、鹿児島島の地方紙に戦場からの手記を送り続けた。

音楽、映画、雑誌などを通して陸軍の様々な広報活動に携わってきた町田は、日米開戦の足音がせまる1941年9月、東南アジアにおける日本のプロパガンダ活動を主要任務とする宣伝班の班長を命じられ、約150人の「文化人」とともにインドネシアのジャワへ送り込まれた。町田は1966年に著した『戦う文化部隊』でジャワでの宣伝活動を回顧している<sup>67</sup>。陸軍は東南アジアをマレー、ジャワ、フィリピン、ビルマの4つの地域に分けて、ナチスの宣伝中隊をまねた情報宣伝部隊を編成し、小説家、ジャーナリスト、画家、音楽家などの多様な文化人が動員された。町田のジャワ班にはジャーナリストの大宅壮一を筆頭に、小説家の阿部知二、富沢有為男、北原武夫、詩人の大木惇夫、歌人の浅野晃、画家の佐々木英夫や小野佐世男、漫画家の横山隆一、作曲家の飯田信夫、映画監督の倉田文人などの才能豊かな文化人が集められた。日本占領下のインドネシアを研究する姫本由美子は、町田を「文化に造詣が深いのが陸軍では変わり者で出世が遅れ」と評価しており、ジャワでも軍上層部との交渉力に欠け、プロパガンダ活動の目的も不明瞭で統率がとれていなかったと述べている<sup>68</sup>。しかし、日本の「聖戦」へインドネシア人を動員するべく行った宣伝班のプロパガンダ活動は、300年以上オランダの植民地支配を受けてきたインドネシア人の独立運動を扇動し、その熱意は町田らの予想をはるかに上回った。日本はインドネシアの独立を認めるつもりなど毛頭なかったため、民族の解放や大東亜共栄圏は「羊

頭狗肉のお題目」と感じていたと町田は回顧し、現地人の独立を願う「文化部隊」の専門家らも軍上層部に反発を覚えていた。

ジャワでの1年間のプロパガンダ任務を終えて日本に戻った町田は、1945年7月の戦争末期、本土決戦に備えるべく西部軍報道部長として福岡市に派遣される。そこには、かつて東南アジアのプロパガンダ活動に徴用された文化人が複数含まれていた。当時報道部にいた作家の火野葦平は、日本の無条件降伏が決定的になった後も、町田が天皇を九州に迎えて連合軍への徹底抗戦を画策した様子を1952年に発表した小説「九州千早城」で描いた<sup>69</sup>。

陸軍時代は常にプロパガンダ活動に関わってきた町田は、戦後、新聞社の創立から海産物販売など様々な事業を手掛けたがどれももうまうまかかなかった。その中で情熱を傾けたのが、陸軍時代に手掛けた映画製作である。極東軍事裁判での連合国による裁きに憤慨していた町田は、『極東軍事裁判—伊丹明の死』という500枚以上におよぶ物語を「ドキュメンタリーなイデオロギー映画のシナリオ」として執筆した<sup>70</sup>。陸軍宣伝班時代のコネクションを活かしたのであろう町田は、東京裁判を担当したジャーナリストに取材して伊丹の足跡を追った。日本の映画プロダクションが町田のシナリオの映画化を企画し、仲代達矢や岸恵子といった俳優陣によるキャストも計画されていたが、「某方面からクレームがついて」映画の企画は立ち消えになってしまったという<sup>71</sup>。

結局、町田にとっては至極不本意なことに、この映画シナリオは1965年の『週刊文春』新年号に「秘録 二重国籍者 伊丹明の割腹」のタイトルで、8頁の長文「ヒューマン・ドキュメント」として発表されるにとどまった<sup>72</sup>。記事には「極東裁判に死の抗議をした二世通訳の悲劇」という副題がつけられ、米軍が「ひたかくしにかくし」た「日米のどこの新聞にも報道されていない」事件として、A級戦犯の死刑執行と同日に割腹自殺を遂げた日系アメリカ人伊丹明の壮絶な死がセンセーショナルに描かれた。この記事の中核を占めるのは東京裁判に対する町田の強い憤りである。伊丹は死をもって「“東京裁判は人道上の罪悪だ”」と

主張したというのが町田の見解であり、日系アメリカ人二世の口でもって町田自身の主張を言わしめている。この時すでに伊丹の死から15年が経過していたが、町田は「断片的に、彼を知っている人たちの記憶をたどって、伊丹明という人間像を組み立て」た。町田の記事に登場する伊丹のエピソードは山崎と島村の著作とほぼ重なっている。「アメリカ人でも薩摩隼人」として鹿児島で成長した伊丹は、帰米後はロサンゼルスの邦字新聞の記者として自分なりの「二世哲学」を訴え、日米開戦後は対日情報戦に従事し、終戦後は東京裁判で言語裁定官をつとめた。記事には、伊丹を直接知る大東文化学院時代の同窓や、新聞記者として東京裁判を取材した人物が実名で挙げられ、帰米した頃の伊丹の写真も掲載されている。伊丹が作成した対日情報戦ビラの文章も引用され、かつてジャワでプロパガンダ戦を率いた町田ならではの視点で細かく分析されている。また、東京裁判の首席検事キーナンと東條英機の法廷でのやりとりを裁判記録から抽出し、日本の被告に対して「好意」を抱いていた伊丹が、いかに日本に不利にならないように立ち振る舞ったかを検証している。歴史的事実と関係者の証言がところどころちりばめられた記事には、誰も知り得ない伊丹自身の直接の言葉も含められ、すべてが事実であるかのような「ヒューマン・ドキュメント」となっている。ただし伊丹のエピソードのほとんどは、対日プロパガンダに関するものを除けば、鹿児島での少年期や大東文化学院時代、あるいは進駐軍として来日した時期のものであり、帰米後の描写は限定的で、戦時の強制収容経験については全く触れられていない。

町田はどのようにして伊丹明の存在を知ったのであろうか。町田による記事およびその他の著作にはその経緯は記されていないが、母親を通じて鹿児島と縁の深い町田が、同じ鹿児島で育った伊丹に親近感を持ったとしても不思議はない。町田は12歳の時に父親の転勤に伴い東京から鹿児島に移り、祖父によって鹿児島の郷中教育を行う「健児の舎」の一つに入れられ、後に伊丹が受けたものと同様の武士道精神を学ぶ機会を得た<sup>73</sup>。伊丹よりも20歳ほど年長の町田が「健児の舎」を通じて伊

丹を知った可能性は低いですが、後に鹿児島出身の幕末志士で過激な尊王攘夷派だった有馬新七の伝記を著していることから鹿児島へ強い思い入れを持っていたことがうかがわれる<sup>74</sup>。

また、日米開戦後、アメリカにいた伊丹のような日系二世がアメリカ人として米軍の対日情報戦に貢献した一方で、同時期に日本にいた日系二世の決して少なくない者たちが日本軍の対米英情報戦に動員された事実にも留意する必要がある。日米開戦によって帰米が不可能となり日本に取り残された日系二世らは、日本の官憲からアメリカのスパイとしてしばしば嫌疑をかけられたため、戦時中の生存戦略として英語という言語能力とアメリカで得た文化資本を武器にしてむしろ積極的に日本のプロパガンダ活動に関わった<sup>75</sup>。国策通信社・同盟通信の二世ジャーナリスト、宇野一磨と藤井龍樹は東南アジアにおける日本軍の進撃を描いた英語によるプロパガンダ本を出版している<sup>76</sup>。町田が陸軍時代にこのような日系二世と知己を得ていたかは不明だが、日本陸軍の情報戦責任者として二世によるプロパガンダ活動はおそらく知っていたであろう。

町田のシナリオによる伊丹の「ヒューマン・ドキュメント」の映画化は大言壮語にも思われるが、この映画企画は実際に伊丹を直接知る日系アメリカ人から「クレーム」を受けていた。帰米二世のジェームス小田は、1983年に『二つの祖国』の大河ドラマ化が日系アメリカ人コミュニティで問題化した際に、すでに町田の「原作」について指摘している。小田はJACLの機関紙 *Pacific Citizen* への寄稿で、山崎の小説は町田による1965年の『週刊文春』の記事がもとになっており、日本シンパの伊丹が東條英機らA級戦犯の死刑執行と同日に割腹自殺をしたというでたらめがさも本当であるかのように語られていると非難した。また、日本の映画製作会社が町田のシナリオを映画化しようとした際には、南カリフォルニアのガーデナ市のJACL支部と、陸軍情報部に所属した日系退役軍人の団体である南カリフォルニアMISクラブ会長で進駐軍時代に伊丹と親しかった二世がこの企画を阻止したと指摘した<sup>77</sup>。しかし、それから20余年の時を経て、町田が創造／想像した伊丹明像は、山崎のべ

ストセラー小説およびNHK大河ドラマとして大きなスケールで描かれることになった。

### おわりに：伊丹明の顕彰を／が導く越境性

山崎豊子による小説『二つの祖国』およびそれを原作とするNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』の主人公、天羽賢治のモデルとなった婦米二世伊丹明は、日系人に関する出版物が日本の大衆メディアで量産される中で、その虚像と実像がないまぜになって語られながらその人物像が想像されてきた。伊丹を直接知る人々は、30年以上前の断片的な記憶をもとに、フィクションとも事実ともつかない情報をたがいに参照しながら、各々が記憶していたと願う伊丹像を再現しようとした。しかし、山崎の小説も含めた伊丹像の起源には、アジア太平洋戦争で日本の対米英プロパガンダを担った元陸軍大佐の胸中にくすぶり続けた東京裁判への批判があった。では、山崎の小説とドラマで蘇った天羽賢治＝伊丹明像は戦中派による対米プロパガンダにすぎなかったのだろうか。1983年に『山河燃ゆ』の放送が問題となった際にも、山崎の小説は、日系アメリカ人に東京裁判批判を代弁させているにすぎないという非難があった<sup>78</sup>。確かに、親日的な日系アメリカ人という伊丹の存在は、日本人があからさまな国粹主義を非難される危険を回避しながら連合国の裁きを糾弾し、「大東亜戦争」の大義を見直そうとする都合のよいものであった。その一方で、フィクションである『二つの祖国』の出版や映像化以降、伊丹明という実在の人物は、縁故のある日本の地域で顕彰されるようになり、東京裁判における日系二世の立場への理解やローカルな戦争の記憶に影響を与えてもいる。最後に、『二つの祖国』以後に起こった伊丹の顕彰の事例から、その顕彰を実現した越境性と、その顕彰が導く越境性を考察する。これらの顕彰は、町田のプロパガンダとしての伊丹像とは異なる婦米二世の表象を示している。

伊丹が少年時代を過ごした鹿児島県加治木では、大河ドラマ放送後も

伊丹の記憶が掘り起こされ、戦中の空襲の記憶にも影響を与えた。伊丹の母校である鹿児島県立加治木高校がドラマ放送から3年後に刊行した記念誌では卒業生の伊丹が特集され、1950年までの生涯を年表にしてまとめた本人自筆の「一代記」のほか、彼を知る人々からの寄稿が多数収録されている<sup>79</sup>。そこでは、アメリカ在住の伊丹の妻、君子や、婦米二世の文学者、山城正雄、また、占領期の東京で伊丹と知己を得た藤井尚治や木梨幸三らが、自らの言葉で伊丹との思い出を語っている。また、伊丹の記憶と並んで特集されているのは、加治木における戦争の記憶である。かつて伊丹も通った旧制加治木中学は、終戦前夜の1945年8月11日の空襲で全校舎が焼失し、生徒を含め多くの死傷者を出した。当時加治木ではこの空襲は日系二世によるものだという流言があり、山城によれば、翌年進駐軍として加治木を訪問した伊丹は人々から「裏切り者、国賊あつかい」にされたという<sup>80</sup>。しかし、加治木空襲を経験した卒業生の今吉孝夫は、後にアメリカで米軍の一次資料を丹念に調査し、この流言は間違いだったという報告をこの特集に寄せている<sup>81</sup>。加治木空襲の記憶は誤った形で伊丹を含む日系二世に対する憎悪に連なっていたが、『二つの祖国』がよみがえらせた伊丹への懐古を契機としてその記憶は修正の機会を得た。

1994年には伊丹の加治木への想いを詠んだ句の記念碑がかつて過ぎた自宅の前庭に建立され、地元出身の彫刻家で伊丹の旧友、法元六郎によるレリーフと山崎の署名が添えられた<sup>82</sup>。伊丹を直接知る加治木中学の後輩で教育者の新納教義は、1995年に在校生に向けて伊丹明と曾木隆輝に関する講演会を行い、それは高校の百周年記録誌に収録された<sup>83</sup>。2004年には、加治木高校卒業生でロサンゼルス在住のスティーブ・鮫島を通じて、アメリカの遺族から伊丹の愛用した弓が加治木郷土館に寄贈され、展示会「二つの祖国・伊丹明」が行われた<sup>84</sup>。鮫島は伊丹の妻、君子を含めた関係者へのインタビューを行い、2013年にノンフィクション作品『天皇を救った男—アメリカ陸軍情報部・日系婦米二世 伊丹明』を著している<sup>85</sup>。加治木とアメリカをつなぐ伊丹の顕彰を可能にしたの

は、日本国内だけでなく世界各地に散らばった加治木高校同窓会のトランスローカルなネットワークであった<sup>86</sup>。

伊丹が在籍した現在の大東文化大学は、1995年に会議通訳者の養成のための通訳論研究指導を大学院課程として日本で初めて設立した。1999年にはその通訳演習室に、半世紀前の東京裁判の通訳で重要な役割を果たした伊丹を描いたレリーフ像が設置された<sup>87</sup>。同大の学園誌『大東フォーラム』は翌年に「いま、なぜ伊丹明か NHK 大河ドラマ“山河燃ゆ”主人公モデルの軌跡」という特集を組み、ドラマで天羽賢治を演じた松本幸四郎や伊丹の娘のミチをはじめ多数の親族や知己からの寄稿で伊丹を追想している<sup>88</sup>。同特集には、伊丹とともに東京裁判に携わった日本人通訳者、島田正一への長いインタビューが収録され、裁判における通訳作業の実情や当時の伊丹の様子が対談形式でつづられている<sup>89</sup>。インタビューの中で島田は、「日本語と英語の間にはノーマンズランドがある」という当時の伊丹の言葉に非常に共感したと語っている<sup>90</sup>。文化を知らなければ日本語と英語で本当に意思が通じあうはずはなく、両言語の間には誰も入れない「ノーマンズランド＝無人島」があるのだという。日米での高等教育を通じて両方の文化に精通する伊丹は「ノーマンズランド」に入ることができた数少ない人間だったであろうが、だからこそ東京裁判における通訳の困難さ、「ノーマンズランド」に立つ帰米二世の孤独と苦悩を抱えていたと考えられる。東京裁判で連合国側の立場で通訳に携わった伊丹を顕彰することは、町田が創造／想像したような「死をもって東京裁判に抗議した日系二世」を記憶することでは必ずしもなく、歴史的な軍事裁判で二つの言語と文化のはざままで苦悩した帰米二世の立場への理解を促すものにもなり得る。

伊丹明の顕彰は、彼の娘ミチによっても芸術作品を通して行われている。1938年にロサンゼルスで生まれたミチは幼少期に両親とともに強制収容を経験し、戦中戦後は父についてミネソタ、東京で生活した。父の死後、ミチは母とともに帰米し、父も学んだカリフォルニア大学ロサンゼルス校で英文学を学び、その後コロンビア大学の日本文学者ドナル

ド・キーンのもとで文学を学んだ。だが東京にいた頃から芸術に強い興味を持っていたミチは、カリフォルニア大学バークレー校での博士課程在学中にフルブライト奨学金を得て日本で陶芸を学び、芸術家の道を歩み始める。ミチは1988年から20年以上に渡りニューヨーク市立大学で芸術を教えてきたが、彼女の初期の作品における版画は抽象的な作品であり、水彩画も色鮮やかな風景画でそこに人物が入り込むことはなかった。しかし、1990年代に写真をコンピューターに取り込むデジタルアートの技術が確立されて以後、ミチは両親の古い写真を取り入れたデジタルアートに取り組み始める<sup>91</sup>。その代表作の一つが、1992-1993年に発表された写真のコラージュ作品「アメリカ人たることのアイロニー」(The Irony of Being American)である。この作品では年代の異なる3つの父、明の写真が中心になっている。鹿児島にいた頃の和服を着た16歳の伊丹、帰米後ロサンゼルスで新聞記者をしていたスーツ姿の25歳の伊丹、星条旗を前面にまとった米陸軍情報部時代の軍服姿の晩年の伊丹が、アンセル・アダムズが撮影したマンザナー収容所の風景を背に配置されている<sup>92</sup>。日本とアメリカ、二つの異なる国家、文化、言語のはざままで生き、アメリカ人でありながら強制収容され米軍に忠誠を示した、帰米二世伊丹の人生の軌跡がその中に浮かび上がる。ミチは父親が写った写真だけでなく、生前に父親が撮影した写真を使って様々なデジタル作品を制作した。また、ミチは母親、君子の写真も多数作品に取り入れている。君子は山崎の小説やドラマが話題になっても沈黙を守ってきたためか、日本語メディアで度々誤解されてきたが、彼女もまた伊丹と同じ帰米二世である<sup>93</sup>。家族写真を取り込んだミチによるデジタルアート作品は、戦争に翻弄された帰米二世の多層的で複雑な越境経験を視覚的によみがえらせている。

さらに、山崎の小説『二つの祖国』は、平成から令和に移り変わる直前の2019年3月末、テレビ東京開局55周年を記念する、二夜連続ドラマスペシャルとして、小説と同じタイトルで映像化された。担当プロデューサーが、「映像化が困難」なためにこの小説は「35年間ドラマ化

されることがなかった」と語ったことから、1984年の『山河燃ゆ』は小説『二つの祖国』の映像化とは別のものだと解釈されている<sup>94</sup>。また、平成が終わりを迎える2019年は日本人がハワイに渡米して150年の節目でもあり、「日系二世の若者たちが自らのアイデンティティを求めて懸命に生き抜いた様を描くことで、私たちの国「日本」を改めて見つめ直す」のがドラマの意図であると同プロデューサーは述べた<sup>95</sup>。1984年の大河ドラマでは、戦中の日系アメリカ人の苦難を日本の視聴者に伝えることが重視されたが、2019年のドラマでは日系二世の経験を鏡として、日本人のアイデンティティを再考するという目的が明言されている。1984年の大河ドラマと比較すれば、2019年のドラマスペシャルはその規模も影響力も限定的ではあったが、戦後70年以上が過ぎて戦争の記憶が日本の若い世代から遠くなる日本社会において、山崎の没後も『二つの祖国』の天羽賢治は映像化され、SNSやブログの中でそのモデルとしての伊丹明がよみがえっている<sup>96</sup>。現代ではインターネットのサイバー空間を通じて視覚的な表象は一瞬で世界中に拡散し、外国語のテキストもコンピューター上で簡単に翻訳できるようになった<sup>97</sup>。こうした技術革新は伊丹が言った「ノーマンズランド」を消し去ることができるのだろうか。未来にそれが可能になるのだとしても、日米戦争を通じて帰米二世が置かれた「ノーマンズランド」の存在を忘れるべきではないし、彼・彼女らの経験をトランスナショナルな視点から歴史の中に位置づける試みは続けられるべきだろう。

本稿は、成城大学特別研究助成「日本の大衆メディアにおける日系人の表象の比較研究」（2019-2020年度）の研究成果である。

注

1 山崎の小説とそのドラマ放送をめぐる論争については、拙稿「越境する日系人の

- 表象—『二つの祖国』と『山河燃ゆ』をめぐる日米での論争から』『変動する社会と法・政治・文化—成城学園創立100周年記念・成城大学法学部創設40周年記念』（信山社、2019年、321-52頁）を参照。本稿はその補論である。
- 2 山崎豊子『山崎豊子全集16 二つの祖国（一）』新潮社、2005年、9頁。
  - 3 小説の連載が『週刊新潮』で始まった頃にロサンゼルスを訪れた石川好によれば、日本語が読める日系人は週刊誌を空輸して取り寄せるほど小説に対して高い興味を示していたという。石川は、その「生々しいモデリング」にもかかわらず、格好よく「できすぎた」小説の筋にはリアリティが欠如していると批判した。石川好「もう一つの『二つの祖国』』『歴史と人物』1983年10月、218-29頁。
  - 4 日比嘉高『プライベートシーの誕生—モデル小説のトラブル史』新曜社、2020年、24頁。
  - 5 前掲書、24-25頁。
  - 6 日系アメリカ人史研究における同化を前提とした単線的な歴史叙述については、拙稿「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と「移民性」』『教養論集』25（2015年）、41-85頁、特に44-46頁を参照。帰米は日系二世の中ではごく少数だと思われがちだが、歴史研究者のマイケル・ジンによれば1941年の日米開戦までに少なくとも4人に1人の二世が日本を訪問ないし滞在したことがあるという。Michael Jin, *Citizens, Immigrants, and the Stateless: A Japanese American Diaspora in the Pacific* (Stanford: Stanford University Press, 2022), 3.
  - 7 東栄一郎「編集者の序 市岡雄二と日系アメリカ人史研究の新しいパラダイム」ユウジ・イチオカ著、ゴードン・チャン、東栄一郎編、関元訳『抑留まで 戦問期の在米日系人』彩流社、2013年、23頁。
  - 8 ユウジ・イチオカ「忠誠の意味—カズマロ・バディ・ウノの場合」『抑留まで』、153-70頁。
  - 9 前掲書、170頁。
  - 10 詳しくは、拙稿「日本の大衆メディアにおける日系人の表象」『教養論集』27（2017年）、70-71頁参照。
  - 11 例えば、大河ドラマ放送直前の1983年12月に出版された、島村喬ほか『実録山河燃ゆ』（ゆまにて出版）の当時の帯には「'84NHK大河ドラマ“山河燃ゆ”のモデル伊丹明が辿った数奇な運命を描くドキュメント！」と記されている。また、後述するように、伊丹明を直接知る人々は、山崎から小説のモデルが伊丹であると聞かされて、インタビューを受けた。
  - 12 河野利佳子『帰米二世の特異性と多様性：帰米二世の1930年代から現代までの軌跡』フェリス女学院大学博士論文、2008年；Jin, *Citizens, Immigrants, and the Stateless*.
  - 13 「伊丹明自筆の編年式区分式一代記」『竜門 加治木高等学校創立90周年記念誌別誌1（随想編）』加治木高等学校、1987年、45頁。
  - 14 木梨幸三「白雲去来」『大東フォーラム』13（2000年）、37頁。
  - 15 木梨、前掲書、38頁；島村喬「日系通訳官“伊丹明”の謎の死」『実録山河燃ゆ』88-93頁。島村の「ドキュメンタリー」では、徴兵忌避、失恋、母の危篤の三つの要素を含めているが、母の危篤が最も重要であったようである。
  - 16 河野『帰米二世の特異性と多様性』168-69頁。

- 17 カール・ヨネダ『がんばって：日系米人革命家 60 年の軌跡』大月書店、1984 年。
- 18 河野『帰米二世の特異性と多様性』168-69 頁。
- 19 堀田哲「伊丹明の足跡を追う」『実録山河燃ゆ』ゆまにて出版、1983 年、219 頁。
- 20 Jin, *Citizens, Immigrants, and the Stateless*, 93-96.
- 21 堀田「伊丹明の足跡を追う」、216 頁。
- 22 Saburo Kido, “Expatriation Will Win Confidence in Second Generation,” *Pacific Citizen*, May 1935.
- 23 Jin, *Citizens, Immigrants, and the Stateless*, 99.
- 24 JACL が戦中、FBI や米軍に情報提供するなど積極的に協力していた事実に関しては、JACL が Debora Lim に内部調査を委託して 1990 年に発表された “Lim Report” でその詳細が明らかになった。当初 JACL は自らに不都合な部分を省略して発表しようとしたため、日系コミュニティ内で激しく批判された。Lim Report についての詳細および全文については以下のウェブサイトを参照。Frank Abe, “About JACL and ‘the Lim Report,’” <https://resisters.com/learn-more/jacl/> (2022 年 1 月 7 日閲覧 以降のウェブサイトもすべて同日に確認)
- 25 「一代記」；カール・ヨネダ『マンザナー強制収容所日記』PMC 出版、1988 年、228 頁。
- 26 日系語学兵についての詳細は、J.C. マクノートン著、森田幸夫訳『もう一つの太平洋戦争—米軍日系二世の語学兵と情報員』（彩流社、2018 年）を参照。こうした語学兵の養成は米海軍でも行われたほか、イギリス、オーストラリア、カナダといった連合国でも行われたが、その中でも米陸軍語学学校は最大規模であった。他国との比較については、武田珂代子『太平洋戦争日本語課報戦一言語官の活躍と試練』（ちくま新書、2018 年）を参照。
- 27 “Akira Itami,” World War II Army Enlistment Records, Electronic Army Serial Number Merged File, ca. 1938 – 1946, National Archives.
- 28 日独間の潜水艦作戦を描いた吉村昭のノンフィクション作品『深海の使者』（文芸春秋、1973 年）は、伊丹の暗号傍受について触れている。暗号は、海軍中将を潜水艦でドイツから日本へ密かに帰国させるという内容だったが、解読時にはすでに数カ月が経過していたため、伊丹の解読が米軍の直接的な行動につながったわけではないようである（134-43 頁）。一方、『二つの祖国』では、暗号の内容はアメリカの原子爆弾開発になっており、主人公は自分の解読によって開発が加速し、広島、長崎の原爆投下につながったのではないかと自責の念に駆られる。
- 29 Jin, *Citizens, Immigrants, and the Stateless*, 107. 一般的に日系語学兵については軍事機密にあたることから、戦後も長い間語られることを禁じられていた。
- 30 フクハラ一家の経験については、Pamela Rotner Sakamoto, *Midnight in Broad Daylight: A Japanese American Family Caught between Two Worlds* (Harper Collins: New York, 2016) を参照。
- 31 東京裁判での通訳に関する研究として、武田珂代子『東京裁判における通訳』（みすず書房、2017[2008] 年）がある。
- 32 自筆の年表「一代記」は 1949 年 2 月 13 日で終わっている。
- 33 郡楠明『化石の花火 極東国際軍事裁判秘話』葦真文社、1981 年、255-56 頁。
- 34 高村喬『東京裁判秘史：日系通訳官の凄絶な死』ゆまにて出版、1983 年、5-6 頁。

- 35 島村ほか『実録 山河燃ゆ』。ゆまにて出版は、1983年のNHK大河ドラマ『徳川家康』放送にあわせて、1982年12月に『実録・徳川家康』を出版している。島村による『実録』も大河ドラマ視聴者に向けた非公式ガイドブックのような位置づけだと思われる。
- 36 大澤功一郎『ふたつの祖国ものがたり』教育出版センター、1984年。
- 37 新納教義「平成7年度文化講演会 平成7年11月16日(木)『二つの祖国』(山崎豊子著)より 曾木・伊丹両先輩の偉業について」鹿児島県立加治木高等学校百年誌編集企画委員会編『龍門：百年誌』鹿児島県立加治木高等学校創立百周年記念事業実行委員会、1997年255-70頁。
- 38 『ザ・Sun』1号、朝日アド本社、1984年1月；2号、1984年3月。
- 39 藤井尚治『あなたは捉われている：ノイローゼ診断簿』産業経済新聞社、1953年；藤井「爆発ノイローゼー二重国籍の重圧」『脱魂のすすめ—ノイローゼとのつきあい—』東明社、1983年、7-32頁。
- 40 藤井『脱魂のすすめ』7頁。
- 41 木梨幸三『デイク・伊丹明の生涯 極東国際軍事裁判秘史』ぱる出版、1985年。
- 42 前掲書、41頁。
- 43 佐藤健一『羅府ぎぎゅう音頭：排日土地法を葬った藤井整の記録』善本社、1983年。
- 44 『羅府新報』1983年12月19日。
- 45 大野芳『羅府に斃る 亜米利加を愛した男の物語』潮出版社、1984年。
- 46 James Oda, “Dave Itami, Dedicated Patriot,” *Pacific Citizen*, December 16, 1983.
- 47 ジェームス小田「今は亡き戦友 伊丹明を憶う」『羅府新報』1984年3月22日。
- 48 小田は占領期に進駐軍として来日したが、日本共産党援助の嫌疑で、1948年に軍司令部から追放命令を受けて帰国した。ジェームス小田『ある日系米兵の手記』あゆみ出版、1973年。
- 49 ヨネダは日本で出版された著書でも、伊丹による小田の追放事件を批判的に述べている。カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』新日本出版社、1967年、134-35頁。
- 50 Karl Yoneda, “Letter to Editor ‘Two Fatherlands’ Distorts History,” *Hokubei Mainichi*, Jan. 19, 1984; カール・ヨネダ「『山河燃ゆ』は親日系か—」『羅府新報』1984年2月8日。
- 51 カール・ヨネダ「“尺”では計れない苦闘と勇気」『文化評論』278巻(1984年5月)、120-27頁。
- 52 Glenn Omatsu, “Karl Yoneda,” *Densho Encyclopedia*, <https://encyclopedia.densho.org/Karl%20Yoneda/> (Last updated July 1, 2020).
- 53 カール・ヨネダ(田中美智子・田中礼蔵訳)『がんばって 日系米人革命家60年の軌跡』大月書店、1984年。原著は、Karl Yoneda, *Ganbatte: Sixty-Year Struggle of a Kibei Worker* (Los Angeles: UCLA Asian American Studies Center, 1983)。訳者の田中美智子は当時共産党所属の衆議院議員。
- 54 山城については、水野真理子「山城正雄の文学活動の軌跡」細川周平編著『日系文化を編み直す 歴史・文芸・接触』(ミネルヴァ書房、2017年)、21-36頁を参照。

- 55 山城正雄「仔豚買いに 日系人ブームと「二つの祖国」」(4)『羅府新報』1984年2月22日。
- 56 山城正雄『遠い対岸 ある婦米二世の回想』グロビュー社、1984年。
- 57 山城正雄「伊丹明の真像と虚像」『竜門』、46-48頁。『二つの祖国』出版後、山城のような婦米二世の文学者による著作が、他にも日本の出版社で出版されるようになった。藤田晃編『南加芸選集 1965-1980』（れんが書房新社、1981年）は、戦中ツールレーク隔離収容所で婦米二世の文学者が作成した日本語同人誌を原点とし、かれらが戦後ロサンゼルスに帰還して作った『南加文藝』の30号を記念してまとめられたものである。『南加文藝』の中核を担った藤田晃の小説は、強制収容を体験した日系人当事者による、より正確でリアルな著作として、その後立て続けに出版された。藤田晃『農地の光景』れんが書房新社、1982年；藤田晃『立ち退きの季節—日系人収容所の日々』平凡社、1984年。『南加文藝』に関しては、篠田左多江・山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に—』（不二出版、1998年）を参照。
- 58 山城『遠い対岸』、192頁。
- 59 木梨『タイプ・伊丹明の生涯』、121頁。
- 60 「盗作二度の実績はダテじゃなかった!?!—山崎豊子著「二つの祖国」にあった“ネタ本”」『マスコミ評論』9（1983年10月）、98-111頁；「NHK大河ドラマ（山河燃ゆ）の原作になったのに・・・山崎豊子「二つの祖国」の華麗なる盗作騒ぎ」『週刊サンケイ』32(45) 1983年10月、24-27頁。山崎は以前にも盗作が問題視されたことがあり、前作の長編小説『不毛地帯』（1978）の盗作疑惑を報じた朝日新聞を山崎が名誉棄損で訴えたが、山崎の主張は認められず和解が成立していた。
- 61 島村喬『二重国籍者』原書房、1967年。
- 62 百瀬三郎（島村喬）『秘録 東京裁判：二重国籍者の悲劇』番町書房、1972年。番町書房はこの時期にアジア太平洋戦争関連の著作を「秘録シリーズ」としていくつ出版しており、島村は戦後28年を経て1972年にグアムで発見された、残留日本兵、横井庄一についての著作も手掛けている。島村喬『化石の兵隊：秘録横井元伍長・極限の二十八年』番町書房、1972年。
- 63 百瀬『秘録東京裁判』1-8頁。
- 64 「山崎豊子著「二つの祖国」にあった“ネタ本” —を書き終えて」『マスコミ評論』9（1983年11月）80-85頁。『マスコミ評論』誌は、その前号で『二つの祖国』と島村の『二重国籍者』の類似性を詳しく検証して盗作疑惑を報じたが、『二つの祖国』を連載していた週刊新潮から猛烈な抗議を受け、記事を取り消すことになり、その顛末もつづった。
- 65 町田敬二『ある軍人の紙碑—剣とペン』芙蓉書房、1978年。
- 66 「満州国皇帝奉迎歌 当選歌詞決定す 栄誉は町田大将子息・敬二大尉」『読売新聞』1935年2月11日朝刊。
- 67 町田敬二『戦う文化部隊』原書房、1967年。
- 68 姫本由美子「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念」立教大学アジア地域研究所編『21世紀海域学の創成：「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ研究報告書 第2巻』、2015年、147頁。
- 69 「幻の九州独立・徹底抗戦論があった...山中の地下壕に残る祖国防衛意思 福岡・

- 筑紫野『産経新聞』2015年12月15日。<https://www.sankei.com/article/20151215-AREXWD7NQVPHBHW3XDIAORW4/2/>
- 70 町田『ある軍人の紙碑』、286-87頁。
- 71 前掲書、288頁。
- 72 町田敬二「秘録 二重国籍者 伊丹明の割腹」『週刊文春』1965年1月14日号、48-55頁。
- 73 町田『ある軍人の紙碑』。
- 74 町田敬二『国士有馬新七』謙光社、1970年。
- 75 東栄一郎「戦時下日本における日系アメリカ人二世」吉田亮編著『変容する「二世」の越境性：1940年代日米布伯の日系人と教育』現代史料出版、2020年、1-32頁。
- 76 宇野一麿については、イチオカ「忠誠の意味」を参照。藤井龍樹をはじめ、戦中の在日二世が抱えたアンビバレンスについては東の前掲論文を参照。
- 77 James Oda, “Guests’ Corner,” *Pacific Citizens*, Dec. 16, 1983.
- 78 石川好「大河ドラマ『山河燃ゆ』の意味するもの—“日系米人”はブームか!?」『正論』134号（1984年4月）、98-107頁；Yuji Ichioka, “A Nisei Critique of ‘Futatsu no Sokoku,’ (Part 4, final),” *Hokubei Mainichi*, March 24, 1984.
- 79 『竜門』。
- 80 山城正雄「伊丹明の真像と虚像」『竜門』48頁。
- 81 『竜門』、12頁。1951年に加治木高校を卒業した今吉はその後アメリカに留学し、その後も仕事でアメリカに駐在を繰り返し、この寄稿時もアメリカ駐在中だった。
- 82 「加治木町広報誌 広報 かじき」596号（2004年6月号）[http://aira-digitalmuseum.jp/wordpress/wp-content/uploads/2019/03/kajiki\\_596\\_h1606.pdf](http://aira-digitalmuseum.jp/wordpress/wp-content/uploads/2019/03/kajiki_596_h1606.pdf)
- 83 新納教義「平成7年度文化講演会」。
- 84 「広報かじき」。
- 85 鮫島は1970年代から40年以上ロサンゼルスで現地日本語メディアに関わってきた。この著作は日米戦争を中心に伊丹の人生を描いた長編ドキュメンタリーだが、一部フィクションであるとの断り書きがある。タイトルに明らかなように、鮫島は、伊丹の働きによって昭和天皇は東京裁判で訴追を免れることができたと考えており、それを望んでいた米軍はその功績を密かに称えてリジョン・オブ・メリットを授与したと解釈する（4頁）。ステイブ・鮫島『天皇を救った男—アメリカ陸軍情報部・日系帰米二世 伊丹明』南方新社、2013年。
- 86 1997年に刊行された百周年記念誌『龍門』によれば、加治木高校の同窓会である龍門会の海外支部はロサンゼルス、サンフランシスコ、ブラジルのサンパウロを中心に3つある。
- 87 レリーフを制作したのは加治木の記念碑と同様に、伊丹の旧友の彫刻家、法元六郎である。「大東文化大学と通訳」大東文化大学大学院、[https://www.daito.ac.jp/education/graduate\\_school/department/economics/interpreter/career.html](https://www.daito.ac.jp/education/graduate_school/department/economics/interpreter/career.html)
- 88 「特集 いま、なぜ伊丹明か NHK大河ドラマ“山河燃ゆ”主人公モデルの軌跡」『大東フォーラム』13号（2000年）、4-99頁。寄稿の中には1984年の大河ドラマで伊丹明を知った視聴者の一人としての河野の文章も寄せられている。
- 89 島田に対するインタビューは主に、大東文化大学大学院での通訳養成課程の設置

に中心的な役割を果たした同大経済学部教授で、通訳者でもある近藤正臣によって行われた。「プースの中の伊丹明—東京裁判通訳者・島田正一氏に聞く—」『大東フォーラム』13号、16-35頁。

- 90 前掲記事、33頁。島田の父は第一次世界大戦前に日本に雇われたドイツ人技術者で、島田自身は日本で育ったが、英語が話せたために日本の敗戦時に連合軍の翻訳部隊 ATIS に入れられ、東京裁判の通訳に抜擢された。
- 91 Mark Segal, “Michi Itami and the Irony of Being American,” *The East Hampton Star*, Feb. 4, 2021, <https://www.easthamptonstar.com/arts/202124/michi-itami-and-irony-being-american>; Biography, Itami Michi, <https://www.michi-itami.com/biography>
- 92 伊丹ミチ「父・伊丹明へのレクイエム」『大東フォーラム』9-15頁。ミチの作品は同誌にも掲載されているが、彼女の公式ウェブサイトでも閲覧できる。*The Irony of Being American*, 1992/1993. Computer generated 4-color lithograph, 36 × 51 inches, <https://www.michi-itami.com/digital-works/view/4037096/1/4037144>
- 93 小説では天羽賢治の妻はアメリカナイズした二世で、悪妻として描かれていたため、伊丹に関連する著作でも実際に君子がそうであったとしばしば書かれている。町田の1965年の記事でも伊丹の妻は夫に理解のない女性として描かれている。
- 94 「イントロダクション 二つの祖国」テレビ東京公式ウェブサイト、<https://www.tv-tokyo.co.jp/futatsunosokoku/intro/> 1984年の大河ドラマのタイトルが『山河燃ゆ』に変更されたことについて、当時山崎はかなり不満を持っていた。詳しくは、拙稿「越境する日系人の表象」326-27頁を参照。
- 95 前掲ウェブサイト。
- 96 例えば、作家で歴史研究者の桐野作人は2019年のドラマを視聴して、自らの出身地でもある鹿児島県の伊丹の史跡を写真入りでツイートしている。<https://twitter.com/kirinosakujin/status/1109642708648230912> 他の個人サイトでも天羽賢治のモデルを伊丹明とハリー福原だとする記述が散見される。
- 97 2019年のドラマも動画サブスクリプションサービスによって世界のどこにいても視聴可能である。